

令和元(2019)年度

日本特別活動学会 第6回 実践事例募集事業

推 奨 実 践 事 例

事例番号 6-2

付せんを用いた委員会活動活性化の試み

(神奈川県)綾瀬市立綾瀬中学校 渡部 裕司(ワタベ ユウジ)

実践テーマ	付せんを用いた委員会活動活性化の試み
実践区分 ○囲み	学級活動・ホームルーム活動 児童会・生徒会活動 クラブ活動 学校行事 その他(具体的に、)
実践事例の 背景、ねらい、 意義など	<p>実践校では、学校経営における重点目標の一つに「生徒会活動の活性化」を数年来掲げてきており、徐々に生徒会活動の活性化がなされてきた。しかし、その実情は生徒会本部役員の頑張りにより生徒会本部の活動は活発になってきたものの、委員会活動は、どの委員会も例年通りの活動を踏襲した、下請け的な活動内容となっていた。そのため、生徒がやらされている委員会活動と言われても仕方がないような状況であった。生徒会活動の活性化を目指す次なるステップとして、活動にかかわる生徒数も多い委員会活動の活性化が求められていた。一方で、委員会活動の活性化と一言でいうのは簡単であるが、指導にかかわる教員の多さも、自主的・実践的な委員会活動を展開するうえでは障壁として機能してしまう面がある。</p> <p>そこで、職員会議などを通して全職員の理解と協力を得つつ、全ての委員会活動において、付せんを用いて委員会活動改善に向けた話し合い活動を行うこととした。さらに、その話し合いで出たアイデアを生かした活動を実現していくことで、委員会活動を生徒の自主的な活動の方向へと変革していくことを目指した。</p> <p>この実践の意義は、付せんを用いることで委員会活動にかかわる全員が意見を表明して議論に参加する点、その議論が活動計画に反映されて実現される点、そうした活動を通して生徒の委員会活動への意欲も高まる点、さらにこの活動に全校で取り組んだ点であると考えられる。</p> <p>なお、実践校は各学年4～5クラスの規模であり、委員の任期は半年間で4月、10月に委員の交代がある。委員会は全部で7つあり、委員数は各クラス1名の代表委員を除き、各委員会男女各1名ずつである。</p>
実践の時期	平成 30 年 4月、9月、10月、2月

【実践事例】（成果と課題を含む）

1. 実践の概要について

「付せんを用いた委員会活動活性化の試み」は、実践者が生徒会活動を所掌するグループ会議に提案したのちに企画会議、職員会議に提案して了承を得たうえで実施された。

実践の内容と時期としては、前期・後期の第1回委員会（4月・10月）で、すべての委員会で付せんを用いた話し合い活動を行い、その話し合いを生かして活動計画を立案した（実践1）。前期には、すべての委員長が集う委員長会（4月）の場で付せんを用いた話し合い活動を行い、委員同士で協働した取り組みができないかを模索した（実践2）。前期・後期の第5回委員会では、すべての委員会で付せんを用いて活動のふり返りを行った（実践3）。以下に実践の内容について記述する。

2. 実践1 第1回委員会における実践

前期後期ともに、第1回の委員会では以下の流れを基本として委員会が実施された。

- ①担当教員の自己紹介、委員会の活動紹介
- ②委員長、副委員長の決定
- ③アイスブレイク
- ④付せんを用いた話し合い活動
- ⑤④の話し合いを踏まえた年間計画の作成

以下に、実践者が顧問を務めた前期第1回代表委員会の実践記録について、「付せんを用いた話し合い活動」の部分に絞って概略を載せる。この学校の代表委員会は、各学級から1名が選出され、担当する職務は「生徒会本部と生徒会会員との橋渡し役」である。具体的な職務としては前期に生徒総会を、後期には生徒会本部役員選挙を担当している。

アイスブレイクを終え、生徒の緊張感が少しほぐれたところで、本題となる付せんを用いた話し合いに入る。

話し合いの目的は、職員全体の共通理解として「委員会活動を改善する」ためとしたが、具体的な話し合いのテーマについては各委員会担当の裁量で実情に合わせて行うこととした。代表委員会は、「生徒会本部と生徒会会員との橋渡し役」を求められていることから、代表委員を経験したことがない生徒に「生徒会本部の活動で知っていること」というテーマを設定し、こちらの話し合いをもとに、代表委員を経験したことがある生徒に設定した「代表委員でこんなことをやってみたらいいのではないか」という話し合いにも生かすように考えた。話し合い活動をすすめる手法も委員会ごとの裁量としたが、初対面の生徒同士のみで話し合う力は十分についていないと考えられることから、代表委員会では書いた付せんを黒板にはってもらい、全体で活動する際には教員がファシリテートして議論を進めた。以下、斜字で示す部分は代表委員会での話し合い活動の記録の概略である（Tは教員、Sは生徒）。

T「ここからは、今年度の委員会活動について考えてもらいます」（付せんを1人数枚ずつ配る）

T「いまからこの付せんに、代表委員会をより良くするための考えを書いてもらいます。代表委員会は、生徒会本部と生徒会の会員との橋渡し役ということも踏まえながら、アイデアを出して行ってもらいます。」

「とはいえ、代表委員をやったことがある人もない人もここにはいると思います。そこで、代表委員を経験したことがある2・3年生は「代表委員でこんなことをやってみたらいいのではないか」と思うことを、代表委員を経験したことがない1～3年生は「生徒会本部の活動で知っていること」を、1つのことに対して1枚の付せんを使って、大きく書いてみてください。」

（・・・数分時間をとると、ほとんどの生徒が少なくとも1枚は付せんが書けている状態となる・・・）

T「いろいろ書けてきましたね。それでは、代表委員でこんなことをやってみたらいいのではないか」というテーマで考えてくれた人は黒板の右側、「生徒会本部の活動で知っていること」を書いてくれた人は黒板の左側に、それぞれ付せんをはりにきてください。たくさん思いつかない人も1人1枚ははってください。」

（生徒は黒板に付せんをはりに来て、全員が付せんをはり終わる）

T「では全員立って、黒板の近くに集まってください。これからいままみんなに考えてもらったことから、代表委員会の活動改善を考えたいと思います。」

教員がファシリテートしながら、アイデアを整理していった。以下に2つのテーマでの話し合いの様子の一部を記す。

A) <生徒会本部の活動で知っていること>の話し合い

このテーマでは、生徒会本部の活動について書かれた付せんを1つずつ取り上げ、代表委員会が協力できることはないか考えさせていった。

「生徒会新聞を作っている」という付せんに対する話し合いの記録を以下に示す（以下【 】は付せんに書かれた内容を示している）。

T「【生徒会新聞】という付せんがありますね。たしかに作っています。生徒会新聞は生徒会本部役員も力を入れていますが、実は7人で新聞を作っていくのってけっこう大変な思いをしているんですよね。代表委員会で取り組めることは考えられるかな？」

S「委員会報告号があるけど、それを代表委員会でつくってみるのは？」

実践校では、生徒会本部役員が執務する生徒会室にパソコンが設置されており、生徒会新聞もパソコンで専用ソフトを用いて作成している。生徒会新聞では生徒会本部の活動報告のほか、委員会活動実施後の報告号も発行されている。会話の様子から、生徒はパソコンを使って何かを作ってみるということに関心があると考えられる。こうして出された【委員会報告の新聞を代表委員会でつくる】というアイデアを、新たな付せんに書き、<代表委員会でこんなことをやったらいいのでは>のエリアにはった。なお、この活動については後期の代表委員会で実現することができた。

B) <代表委員会でこんなことをやってみたらいいのではないかと>の話し合い

こうして<生徒会本部の活動について知っていること>の話し合いから、いくつかの付せんが<代表委員会でこんなことをやってみたらいいのではないかと>に加わった。次に、それらの改善策が書かれた付せんについて検討していった。それぞれの改善策が書かれた付せんを、まず似たもの同士でまとめた。そのうえで、実際に取り進むかどうかを1枚ずつ検討し、図表1のように、縦軸を実現度（実現しやすいー実現しにくい）、横軸は意欲（やってみたいーやりたくない）の2つの座標軸で整理していった。

T「【落ち葉拾い】はどうですか？」

S「いや、これは人数も足りないし、やるなら美化委員会だと思う」

S「たしかに落ち葉たくさん落ちてるけど、これは難しいよね」

T「じゃあ、この辺ですか」

（やりたくないー実現しにくい（図表1のDエリア）内の中央にうつす）

S「これはもっと左下じゃない」

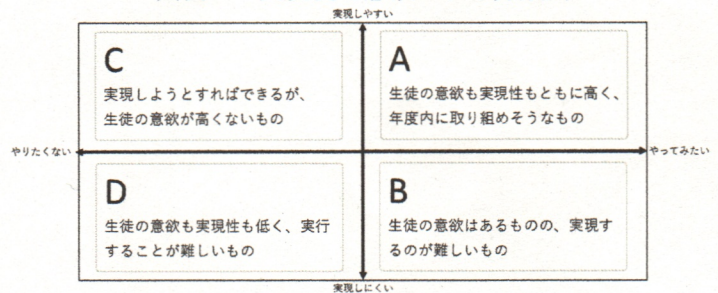
S「これは自分たちではできないね」

こうした議論の中で、【落ち葉拾い】の付せんは図表1のDエリアの最も左下に移した。

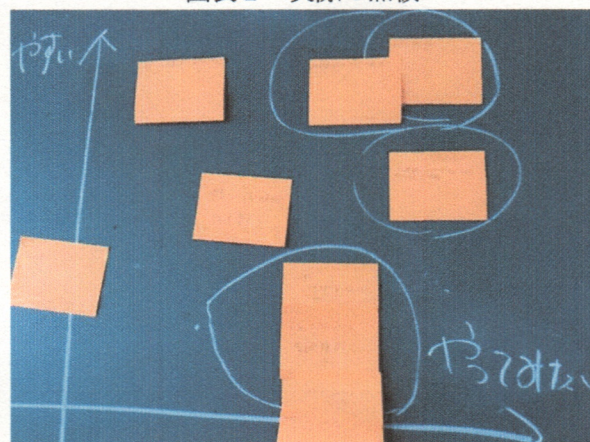
なお、委員会活動に参加する生徒の全員が必ずしも委員会活動への意欲が高いわけではない。この話し合い活動の中でも、後ろ向きな発言をする3年生が数名いた。しかし、そうした生徒は話し合いの中での発言を他の生徒から批判され、それ以後マイナスな発言は控えるようになっていった。

話し合いを経て、【体育祭で生徒会種目の手伝い】【生徒会（本部）の活動の手伝い】、【生徒会本部からのお知らせをクラスの前で言う】などの付せんが検討の結果、図表1のAエリアとなり、実際にその後の活動で実施されていった。

図表1 実現度と意欲による分類図



図表2 実際の黒板



○で示された付せんは、議論の結果、実施する方向で進めていくことになったものである。

3. 実践2 委員長会での実践

実践1と同様の方法を用いて、委員長会でも、委員会同士が協働して取り組みそうなこと、他の委員会にやってほしいことをテーマとして付せんを用いた話し合い活動を実践した結果、以下のような活動が提案された。

- ・生徒会新聞で本の紹介をする（生徒会本部×図書委員）
- ・図書室の新着図書を放送委員が校内放送でお知らせする（放送委員×図書委員）
- ・昼の校内放送で各委員会のお知らせをする（放送委員×各委員会）
- ・石けんやトイレトペーパーの定期的な管理・補充（保健委員への要望）

4. 実践3 前期・後期第5回委員会反省における実践

任期中最終となる委員会開催時には、付せんを用いたふり返り活動を行った。この話し合いはこれまでに行ってきた活動をふり返り、次の活動につながる改善策などを出すことを目的としている。もともと実践校では、委員会の任期の最後に活動をふり返ること自体は行われていた。しかし、従来の取り組みは、生徒一人ひとりにふり返り用紙が配られ、委員としてできたこと、不十分だったこと、次の委員の人に伝えたいことについて各自が記述し、ふり返り用紙を提出した生徒から委員としての活動は終了となる。そしてそのとりまとめを委員長や副委員長が担当し、教室に残って全員のふり返り用紙に目を通し、内容を1枚の用紙にまとめ生徒会担当教員に提出するという方式であった。この方式では、委員長・副委員長を除けばかかる時間が短くて済む面もあるが、話し合いはされず、内容は共有されない。また、記述の内容は単に課題を指摘するだけで次につながるようなものにはなっておらず、次の任期の活動に役立つようなふり返りとは必ずしもなっていなかった。

本実践で取り組んだ付せんを用いたふり返りの手順としては、まず生徒に青赤2色の付せんを配り、よかった点を青色の付せん、改善点を赤色の付せんとして各自が記入した。付せんは各自、赤・青の少なくとも1枚は必ず書くこととし、全員の参加を促した。そのうえで、学年や全体で共有を図り、改善点については具体策を考えていくことを基本とした。

筆者がかかわった代表委員会では、運営を担当する生徒総会や生徒会本部役員選挙について、準備も生徒たちがよく考え、新たなアイデアも取り入れて立派な運営ができたことで、青色の付せんが多くなった。このことにより、ふり返り活動を通して自分たち自身でよく活動できたことを実感できる機会となり、自己肯定感や自己有用感、委員会活動へのポジティブなイメージを育む場として機能したと考えられた。

また、学級委員会での改善点についての話し合いでは、時期を決めて「チャイム着席運動」に取り組んでいるが、その取り組み方に課題があったことが提起された。そこで次の委員に向けては「(自分たちは)声かけが十分に出来なかった」ので「周りの人への声かけをしっかりとしたほうがいい」といったように改善策の議論がされ次の委員に引き継がれた。本来であればこうしたふり返りや引き継ぎは求められる当たり前前の姿であるかもしれないが、委員会活動に(少なくとも筆者の目から見て)課題を抱えていた実践校にあって、こうしたふり返りと引き継ぎが行われるようになったこと自体が、委員会活動を教員主導から生徒主体のものとし、委員会活動の活性化に向けて歩んでいくための大きな一歩なのである。この一歩を踏み出すうえで、付せんを用いることの有効性を感じる一場面であった。

5. 成果と課題

本実践の成果として、付せんを用いた話し合い活動を通して、複数の委員会で生徒の意見が反映された新たな活動が加えられる形となった。また、この話し合い活動は、委員会活動をやらされている活動から自ら取り組む活動へと変化を目指したものであったが、教員に実施したアンケートでは「生徒が委員会活動に前向きになったと感じる」という記述がみられた。さらに、委員長会での話し合いの結果、委員会同士が協働して活動する事例も生まれた。これらのことから、委員会活動を活性化することができたと考えられる。

課題としては、まず時間の問題が挙げられる。委員会活動は、実践校の場合およそ1か月に1回委員会開催日が設けられ、放課後に定例の委員会活動を行っている。放課後に委員会が開催されるということは、委員会活動に熱心に取り組めば取り組むほど、教員、生徒ともに委員会活動に取り組む時間が長くなるので、部活動へ参加できない生徒が出てくるなど、負担感につながってしまう。また、付せんを用いた話し合いでは「生徒たちのアイデアは思っていたよりも出てきてびっくりした」と報告をくれた教員もいたが、月に1回の活動頻度ではせつかくのアイデアも実行しきれないものもあった。教員の多忙さが世間からも注目され、働き方改革が急務とされる中で、時間との折り合いをどうつけていくのかは大きな課題として残る。

また、教員の指導観やファシリテート力なども問題になるだろう。これまで長く上意下達型の委員会活動を展開してきたことから、生徒の話し合い活動に慣れていない教員も中にはいる。ファシリテート力をつけるには経験が大きくものをいうと考えるが、そうした教員がよりよい話し合い活動を展開できるように支援していく策を確立していくことが求められる。